

「学校」の終焉と再生 The End and Renewal of School Function

深谷昌志

(東京成徳短期大学)

Masaki FUKAYA (Tokyo Seitoku Junior College)

要 約

日本の学校に硬直化した没個性というような印象を受ける。本稿は日本教育に近代化の視点から、日本の学校には、①基準の設定、②集団主義の導入、③伝達型の授業、④淘汰機能の発揮の4特性が認められることを指摘した。そして、そうした特性がどのような歴史的な背景から生じたのかを検討した。そして、そうした伝達型の学校が情報化社会の到来につれて、終焉の時を迎えていることを明らかにすると同時に、再生の道を模索した。

キーワード：近代化、学校文化、伝達型、情報化社会

○ はじめに

学校の地盤が沈下しているような印象を受ける。不登校やいじめ、学級の荒れなど、児童や生徒の学校不適応を示す現象が目につく。親たちの学校に対する信頼も高いといえないし、さまざまな教師の問題行動を耳にする機会が少なくない。

それだけに、学校のあり方をいろいろなレベルから考察することが必要になる。教育行政の動向や教育課程の編成の問題、教師の指導力、生徒指導の体制、生徒の変容など、列挙していけば限りがない。

しかし、現在の状況は、個々の問題も越えて、学校のあり方そのものが全体として問題になっているように思える。

アメリカの学校を訪ねると、明るく伸び伸びとした感じがするし、ヨーロッパの学校は落ち

着きやゆとりを醸し出す場合が多い。アジアの学校では元気いっぱい生き生きとしている印象を受ける。それに対し、日本の学校に画一的で没个性的な雰囲気を感じる。ここ数年、日本の学校が変わったといっても、そうした堅苦しさは変わらずに残っている。いじめや学級の荒れ、不登校などの問題行動の底流にそうした硬い学校文化の存在が感じられる。

そこで、本稿では、マクロな視点から、日本の近代学校の特性を明らかにして見たいと考えている。いじめや不登校の問題が発生した時、学校の対応が不適切で、生徒の気持を考えない教師が多い、あるいは、学校は柔軟な対応ができず、生徒を支えるのが下手などと感じる。

そうした状況は、個々の教師や学校の問題であることはたしかだが、それにしても、同じ状況が多くて生じている。それだけに、日本の学校は共通の問題を抱えていると思わざる

と得ない。臨床心理を扱う本紀要に不向きとも思うが、生徒を取り巻く学校のあり方を考える一助になればと考え、学校論を掲載することにした。

○ 学校をとらえる2つの視点

学校を考える時に、「上から」、つまり大学を中心に高校、中学へと視点を下ろしていくアプローチと、「下から」、つまり、小学校から中学、高校へと視点を上げていくアプローチとがある。

「上から」の場合、西欧なら、ギリシャのプラトンの時代は古すぎるにしても、ポローニヤやハイデルベルグのような大学の発祥が考察の出発点になる。そして、優れた哲人の講義はギリシャ語やラテン語で行なわれるので、講義を聴くために、ギリシャ語の習得が必要だった。そのため、大学の近くにギムナジウムという名の文法学校が誕生したというのが、学校論のルーツになる。

日本の場合でも、奈良平安の貴族の教育はともあれ、江戸時代の藩校の存在が目にとまる。藩学は現在と無縁のように感じがちだが、各県トップの高校の多くが藩学の後身であることを考えると、「上から」の視点の重要性が理解できる。

それに対し、「下から」の視点の場合、ルーツをそれ程古くまで遡ることはできない。庶民に教育が求められる、あるいは、庶民が教育を求めるのは、先進社会でも19世紀の半ば以降である。

高等教育は頂点に位置しているので、極論すると、1校を創設すれば高等教育は成り立つ。したがって、多少の無理をすれば、発展途上の社会でも、先進社会並みの高等教育を持つこと

は可能だ。実際に、少なくとも校舎や設備の面では、発展途上とよばれる社会で、日本の大学よりはるかに充実した大学に出会うことが少なくない。

それに対し、初等教育は底辺に根ざした教育なので、津々浦々に学校網を張り巡らす必要がある。換言するなら、初等教育の場合、学校は社会全体の縮図のようなもので、その社会の姿がストレートであらわになる。その結果、大学や高等学校は国際的に共通したレベルが保たれているが、初等教育はそれぞれの社会によって、その社会なりの学校が生まれる。そこで、日本の学校の特性がどう形成されてきたのかを、初等教育を中心に考察することにしたい。

○ 土着と近代化との相克

子どもが学校へ通う。現在ではごくあたり前の光景で、学校へ行かない子どもは不登校とよばれ、問題視される。しかし、子どもが学校へ通い始めるようになったのは、それ程昔の話ではない。

もちろん、旧士族層、特に男子は江戸時代から藩校に通っていたので、就学の慣習が身についていた。しかし、民衆の場合、江戸末期に近づくにつれ、寺子屋へ通う子どもの姿が増加するが、それは、江戸などの大都市周辺に限られていた。

明治維新を迎え、近代学校が発足することになるが、法的にいえば、明治5年に学制が発布され、「邑に不学なく家に不学の人なからしめん事を期す」の通りに、子どもの就学が定着する青写真が描かれていた。しかし、明治初年の日本は、財政的な基盤に乏しく、校舎建築もおぼつかなかった。長野県松本を訪ねると開智学校が、岩村田に中込学校が残され、明治初年に

建てられた校舎に接することができる。しかし、そうした校舎は文明開花を象徴する数少ないモデルスクールで、学校の多くは寺子屋を受け継いだものであった。

そうした寺子屋でも就学率は高いとはいえないが、特に、民衆の間で、明治政府の作った学校へ就学するのを嫌う風習が強かった。民衆はどうして学校へ行かなかったのか。

子どもたちが働いていて、学校へ行くゆとりがなかったのもたしかだが、月謝が高く、学校へ通う気持ちにならなかったのも就学率が低い一因であった。それ以上に、学校で教える内容が役立つのが問題であった。

寺子屋へ通えば、身近で役立つ知識を伝達してくれる。以呂波から、名頭、国頭、往来物まで、すぐに役立つ教材を、懇意の師匠が教えてくれる。しかも、それぞれの必要性に応じて、以呂波のみで退塾してもいいし、経済的にゆとりがあり、向学心に燃える子どもは往来物や論語まで学習するのも可能だった。学習者の需要に対応して、個別に対応できるのが寺子屋のよさであった。

それに対し、新しい学校では、万国史や万国地理など実生活からかけ離れた教材を、どの子どもにも共通に伝達しようとした。

寺子屋と学校とのこうした教材の開きは教育についての視点の違いを示している。寺子屋の教育は子どもの生活にすぐ役立つことを基本として成立しているのに対し、学校は文明開花以後の社会を視野に入れて、国民に身につけて欲しいものを伝達しようとしていた。

近隣諸国が植民地化されていく状況の中で、西歐的な知識を体系的に習得させ、西歐に追いつきたいと願う。そうした発想に立つと、伝統的な往来物では西歐化を望めないのは明らかだ。そこで、新しい教材として万国地理や万国

史などの情報の伝達が大事になる。

そうした教材の違いを示す典型が算数であった。寺子屋は読み書きが主流で、算数を扱う寺子屋は少数だが、扱う時は和算だった。庶民の生活では、寸や匁などの和算が使われていたから、和算の習得を望むのが当然であった。しかし、学校では西歐流の洋算を教材に考える。たしかに、西歐化した社会を実現させるためには、メートルやグラムなどの洋算的な技法の伝達が必要になる。メートルの分る生徒を育てたいのである。

このように和算と洋算とは、土着の文化を象徴する寺子屋と近代化のシンボルとしての学校との違いを端的に示している。そして、民衆の多くはメートルを扱う学校を拒否して、寸を教える寺子屋を慕った。

そうした状況に対し、明治政府は、財政的に学校を作るゆとりはないし、無償教育も実施できない。そこで、実現の可能性はともあれ、洋算の導入のように、望ましい方向性を示すことに努めた。そうになると、教則だけでなく、校舎は寺子屋風でなく、西洋建築でというような基準を設定する。あるいは、教員は師範学校卒業を原則とするなど、すべての面で、法的な基準を設定する必要がある。その結果、法規的に見ると、明治初めに整然とした学校教育が展開されていたように見える。しかし、それは、法規的なとらえた場合で、実質の教育は寺子屋の延長で、寺子屋の師匠が手習いをさせるのが明治以降の教育の一般的な姿だった。

○ 日本型学校文化の形成

就学率が上昇して、初等教育への進学が定着したのは明治30年代だった。日清戦争を体験して、軍部を中心に国民の協力を求める必要性

が感じられた。そのため、女子を含めて、すべての子どもに基礎的な教育を受けさせ、国策を理解させることが大事になった。

それと同時に、軽工業を中心とする産業革命が進んで、労働者にも基礎的な読み書き算数の取得が求められるようになった。さらに、明治32年から、それまで居留地に居住を制限されていた外国人が、自由にどこでも居住できる内地雑居が実現されることになった。現在では考えられない状況だが、当時では、日本女性が外国人に魅了されて、日本人が少なくなってしまう。そうした危機感から、日本人としての自覚を促すためにも、国民教育の必要性が説かれた。

このように、明治30年代に入ると、近代教育を求める動きは、これまでの政府に加え、戦争関連で軍部、軽工業の実業界、さらに、内地雑居で宗教界などのように、国を挙げての就学運動になった。

それだけに、可能な限り早い時期に、国民皆就学を実現させ、底辺の子どもにも学力をつけさせたいという動きは強かった。そうはいっても、経済的に貧しい状況はそれ程変わっていない上に、就学の徹底を求めるので、そのための方策が必要だった。

そうした中から、効率のよい教育を目指すために、個人でなく、集団を単位に教育を進めるシステム作りが開発された。学級制の導入がその象徴で、学級制の許では、教師さえしっかりとしていれば、多くの子どもの教育が可能となる。

もちろん、明治30年代の場合、一学級の定員が70名程度で、学級内での決まりを作らないと、学級としてのまとまりを保てない。そこで、児童管理規則を設定して、教室内で子どもたちの行動の仕方を規定している。具体的には、「授業の始まりと終わりは礼をする」や

「授業中は席を立たない」、「教室内で発言する時は挙手をする」、「挙手の際は右手の指をまっすぐに伸ばす」などである。集団行動への遵守に象徴されるこうした規則は教室内外の細かい行動まで及んでいる。しかも、こうした規則が各県でほぼ同じ形で制定されたところに特色がある。さらにいえば、挙手や着席など、この規則は、その後大きく変化することなしに現在に至っている。

アメリカの学校を訪ねると、それぞれの教室が個性的で、子どもたちが自由に動き回っているように見える。それに対し、日本の学校はどの教室も同じ感じで、子どもの行動も、よくいえば規則正しく、突き放していえば、画一的で没個性なのに気がつく。

日本の学校のそうした画一的で雰囲気は、ここでふれているような明治30年代に開発された学校管理規則の名残といえよう。

管理規則で子どもの行動を規制することができても、それだけでは授業を展開できない。そこで、誰でも一定レベルの授業ができるように、授業のパターン化が試みられた。授業の展開を「予備」「提示」「比較」「統括」「応用」の5ステップでとらえる5段階教授法で、どの教師も指導案に従って授業をすれば、大きな崩れを生じることなく、授業を展開できる。

しかも、各地域の中心的な学校で、5段階教授法のモデル授業が公開され、段階をふまえた授業のスタイルが各地に浸透した。そして、明治末になると、教師による一斉授業を基本とした伝達型の授業形態が多くの学校で定着するようになった。

○ 淘汰機関としての学校

このように明治30年代に入って、就学の動

きが高まり、明治40年代に入ると、ほぼ100%の就学が定着する。そして、明治初年からの①基準設定型に、明治30年以降の②学級集団の活用、③伝達型の一斉授業が加わって、日本的な学校文化が浸透するようになる。

そして、大正から昭和にかけて、小学校への就学が定着するにつれて、それ以上の学歴を求めて、中学校進学者が増加し始めた。特に伝統のある中学や商業、高等女学校への進学は難関で、10倍を越える競争率は稀でなかった。そうした状況の中で、小学校は上級学校進学のための補習教育機関としての性格を強めていく。そして、これまでの①基準性、②学級集団、③伝達の特性に加え、④淘汰機関としての学校という機能が増すことになる。

進学のための学習というと、学習塾通いを連想する。実際に明治時代でも、私塾や家庭教師について受験勉強をする子どもの姿が見られる。しかし、(旧制)中学受験の場合、学力をつける場はあくまで学校だった。

特に、昭和になると、どの学校でも受験者が増え、そうした子どもの学力を伸ばすために補習教育が開始されるようになった。高学年になると、進学希望の子どもを集めて、夜遅くまで担任が補習授業をする形である。そのため、非進学の子どもの勉強がおろそかになるだけでなく、進学者も心身両面で健康を損ないがちという批判が強まった。

そうした加熱する一方の受験の動向に対する方策として、中学入試にあたって、筆記試験の重みを減らし、小学校からの内申や面接を重視する改革が試みられている。

昭和2年度には、筆記試験を全廃し、小学校からの内申と中学サイドの面接で合格者を決定する改革が行なわれた。残念ながら、この改革は小学校の提出する内申に対する中学サイドの

不信が強い。あるいは、大量の受験生を短時間に面接することへの不慣れが加わって、入試が混乱した、その結果、1年で入試の手直しが必要になり、筆記試験が復活することになった。

過熱化する受験に対し、文部省は入試のあり方を検討すると同時に、大正末から昭和にかけて、学校での補習教育を制限あるいは禁止する通達を発している。しかし、学校や担任への評価が上級学校への進学率で決まる状況が強いので、形式的に補習を自粛したことにして、多くの学校では隠れて補習に取り組む状態が続いた。

○ 外からの改革の限界

これまでふれてきたことを要約するなら、まず、①近代学校の出発にあたり、学校の理想的な姿についての法的な基準を明らかにする。努力目標としての基準設定である。そして、②教育条件が充たされるにつれて、学級集団を基本とした伝達型の授業形態が形成される。一斉授業の形での教育である。そして、さらに③教育が普及するにつれて、学級内容の習得状況に応じて、子どもたちをそれぞれの進路に振り分ける淘汰機関としての機能を担い始める。

第2次大戦後、アメリカの影響を受けた教育改革が実施された。633制の学校制度の導入や男女共学の実施、教育委員会制度の設置などの代表される改革である。

敗戦直後の混乱の中で、それまでの6年間の義務教育を3年延長して、津々浦々に3年制の中学校を設置することになった。当時の状況では、占領軍の絶対的な指令に基づいた改革なので、時期尚早とか財政的に困難などとはいえず、とにかく実行を迫られた。

現在では歴史の中に埋もれてしまったが、関

係者の血と涙の中から、新制中学の設置が進んだといわれる。男女共学や教育委員会制度などの改革はいわば外からの強圧的なものだった。しかし、戦後の改革はアメリカの中でも革新色の強いカリフォルニア州などをモデルにしたものだったので、現在から見ても、男女共学や単線型の学校制度など優れた内容のものが多い。

大きくとらえると、明治以降の教育の仕組みは2度の転換期を持っている。第1は、幕藩体制が崩壊した明治維新时期で、明治初めに西欧志向的な教育の枠組みが作られ、その体制は敗戦まで続いた。第2は、敗戦を契機とした戦後の民主化を目指した改革で、その仕組みは半世紀を経た現在まで持続している。

明治維新时期の西欧化と第2次大戦後の民主化は、ともに革命的といえる位、きわめて革新的な性格の強い改革だった。こうした状況を考えると、平時でも教育の部分的な手直しはできる。しかし、基本的な教育改革は動乱期でないと実行できないという感じがしていく。

そうした敗戦の動乱に加え、昭和22年から24年にかけて、団塊の世代が生まれ、人口増への対応が教育の課題となった。633制の実施でも困難なのに、人口増が加わる。校舎の新築計画を立てても、児童数の増加に追いつかず、2部授業が慢性化していた。

このように第2次大戦後の教育改革は日本の教育の民主化に大きく貢献した。しかし、長い間、「臣民の道」に象徴される偏狭的な国家主義の教育が定着してただけに、そこからの脱皮は外圧を利用しての形にならざるをえず、内からの勢いは乏しかった。その結果、改革が表面に流れ、学校内に新風は浸透しなかった。学校制度や教育行政の改革ははなやかだったが、改革の機運が教室に及ぶことは少なかった。

アメリカの流れをくむ民主的な教育といえ

ば、個性を認めた個別化された教室が連想される。しかし、民主的な社会科の授業が教師の主導の許で一斉授業の形で伝達される。しかも、指導要領で国の基準を示し、それを参考にした教科書が作成されるので、どの学校でも同じような授業が展開されることになる。

そうした意味では、すでにふれたような日本教育の特性、つまり、①法的な基準を設定して、②学級集団を単位に、③知識を伝達して、④その成果によって子どもを淘汰する学校文化は、批判の対象とされることがないままに、現在まで受け継がれることになる。

団塊の世代が成長して、ほっと一安心するとまもなく、昭和40年代の後半になると、団塊のジュニアが出生する。昭和48年の209万人がピークで、ジュニア世代の成長につれて、小学校や中学校の増設が行なわれたのは記憶に新しい出来事であろう。

○ 情報化社会の中の学校

これまでふれたように、日本の学校は明治以来の伝統的な学校文化を受け継いでいる。しかし、ここ3、40年の間に、子どもが成長する環境が激変した。中でも、特に情報化の影響が大きい。昭和30年代後半に、家庭にテレビが入ってきて、子どもの生活が大きく変わる。そのテレビも、昭和50年代後半になると、さらに、新たな状況を示す。

①家にあるテレビの台数が増えテレビがパーソナル化した、②ビデオ機能の内蔵によりリアル・タイムに視聴しなくても良い、③テレビゲームの開発によりテレビをゲームとして利用できる、④衛星放送やケーブルテレビの普及によりチャンネル数が増加し、24時間視聴が可能になった、⑤リモコン機能が充実し、自分から

働きかけなくとも、テレビを充分に楽しめる、⑥ファックスなどと連動させて、テレビのツウ・ウエイ化の可能性が増加したなどである。

それと同時に、ラジカセそしてパソコン、パソコン通信など、子どもの回りに新しい魅力的なメディアが次々と登場してくる。そうしたメディア社会の到来は、子どもの生活と同時に、子どもの学習のあり方を変える。

テレビやラジオ以前、子どもは家庭の中で手伝いをしたり、家業を助けたりして、さまざまな体験を身につけていくことはできた。しかし、学校に行かなければ新しい情報は入ってこなかった。学校は新しい知識を伝達してくれる文明のセンターだった。学校へ行き、活字はきちんと学ばないと読解力がつかない。平仮名や片仮名に加え、漢字があるので、おとなの本を読めるようになるのは小学高学年であった。

それに対し、テレビ時代に入ると、ストレートな形で情報が家庭に飛び込んでくる。子どもも、テレビを見ているだけで新しい情報を入手できる。テレビを通して、子どもはこれまででは考えられないくらい多くの情報を吸収する。テレビの場合、年齢に関係なく、誰でも画面を理解できる。子どもでも、ニュースをみれば、行ったことのない遠い国のできごとをリアルタイムでみることができる。そうした意味では、現代の学校は、もはや情報センターといいくらい状況を迎えている。

さらにいえば、現代になるほど、おとなになるために必要とされる知識の量が増加している。昔なら、パソコンや英語は小学生に不要であったし、ダイオキシンやオゾン層なども学ぶ必要はなかった。しかし、現代では、そうした情報を獲得しておくことが重要になる。その結果、子どもたちが学ぶことを求められる知識量が爆発的に増加している。

それでも、新しい知識をなんとか子どもに伝達できたとする。しかし、ベルリンの壁がなくなり、ソビエトが解体したなど、崩れないと思われた枠組が崩壊する。あるいは、人種や性などについてまったく新しい見方が広まってくる。こうした形で知識の体系が変化し、時には、獲得した知識が誤りとなる。

かつての社会では、知識が大きく変動しなかったもので、獲得した知識はその人の生涯有効性を保っていた。しかし、現在は、知識の有効期限が短くなり、知識の陳腐化が進む。

このように必要とされる知識が飛躍的に増大するだけでなく、陳腐化が激しくなる、それと同時に、誰でもいつでもどこでも、情報を簡単に入手できる社会になった。そうすると、知識の伝達を目的とした学校は、本来の役割を失い始める。知識の獲得だけなら、学校に行かなくともよいという考えも成り立ってくる。それに加え、獲得したとしても、知識はすぐに古くなり、時代に合わなくなる。

基準に基づいて、集団の形で、知識を伝達するのが、日本の学校の特性だと指摘してきたが、その根本ともいべき学校の伝達機能が揺らいでいる。そうだとしたら、「学校」は何のため存在するのか、存在理由が危うくなる。それにしても、子どもたちは長い時間学校に拘束されている。

○ 学校の再生は可能か

何事にも生と死があるように、学校も、使命を終え、終焉の時を迎えているのかもしれない。少なくとも、過去の体質から脱皮しない限り、学校の未来は暗いように思われる。

学校再生の手がかりは、伝統的な学校からのいかに脱皮するかであろう。これまで、キーワ

ードのように指摘してきた属性に関連させて、改革の方向性を指摘しておこう。

- ①中央集権的に基準を設定するのではなく、地方分権を進め、各地域や学校のプラン作りを進める。特に指導要領の拘束力を弱め、各地の行政レベルに教育課程編成権を委ねる。そうなれば、地域性を生かした学校作りを可能となろう。
- ②教育単位として学級集団の枠を緩めて、個人レベルの学習を進める。少なくとも、他学級との交流や学級を解体して学習を進める時間を用意する。
- ③教師による伝達型の授業に代わって、生徒の自主学習を学習の中心にする。そのためには、アシスタント教師の採用や親たちの授業参加、図書室の充実などが重要になろう。
- ④学力を競わせ、淘汰する形に変わって、それぞれが自分の目標を定めて、学習計画を立てる形式を大事にする。個性に対応した学習を学校の基本に据えたい。
- ⑤一定の年齢の子どもに、一定期間の間に一定の情報を与える閉鎖的な学校から、個々の学習を助ける地域に開放されたセンターへ学校のシステムを変更する必要があるだろう。
- ⑥それと同時に、学校は若い世代を対象とした完成教育を目指す機関ではなく、誰でも、いくつになっても、必要な時に必要な情報を入手できる形の学校体系への転換が必要であろう。

こうした学校の姿は日本にはなじみにくいかもしれない。しかし、欧米の学校はすでにこうした方向への歩みを始めている。そうした意味では、日本の学校の脱皮が遅れすぎているのかもしれない。

参考文献

教育の発達を概観する考察をしたので、個々の参考文献をあげると多数に上る。基本的な文献の中から拙著も含めていくつかをあげておく。

- 1、国立教育研究所「近代日本教育史」3～5巻 昭和49年
- 2、文部省「学制八十年史」 昭和29年
- 3、土屋忠雄「明治前期教育政策史の研究」 文京図書 昭和37年
- 4、浜田陽太郎他編「近代日本教育の歴史」上～下 日本放送出版協会 昭和53年
- 5、天野郁夫「教育と近代化」 玉川大出版 平成8年
- 6、深谷昌志「子どもの生活史」黎明書房 平成7年
- 7、深谷昌志「学歴主義の系譜」黎明書房 昭和43年